

# 対馬鰐浦におけるコヤの形成原理に関する研究

建築デザイン研究室 森下涼

## Abstract

対馬には、「コヤ」と呼ばれる倉庫を母屋と別に建てる文化がある。幾度と起こった大火による被害を抑えるために、貴重品をコヤに分散させ、保管してきたのである。貴重品の保管のために生まれたコヤであるが、その利用方法は多岐にわたり、生活に密着して活用されてきた。集落によれば、コヤは密集して建てられ、コヤヤシキという、独特の景観を成している。本稿は、同じような様相を持つコヤであるが、詳細に見ると非常に多様であるコヤの形成原理を明らかにすることを目的としている。現地調査を2回行い、実測調査から、コヤの現況を図面として残し、ヒアリング調査を通して、今、昔のコヤと住民の関わり方を分析していった。結果として、コヤの形成に関わる外的因子を明らかにし、形成原理を解明した。この結果はコヤの研究に対して新たな示唆を与えている。

## 第1章 はじめに

### 1-1 研究の背景と目的

対馬には、「コヤ」と呼ばれる倉庫を母屋と別に建てる文化が存在する。このコヤは、幾度と襲った大火の教訓から生まれた。貴重品を母屋とコヤに分けて保管することにより大火による被害を抑えてきたのである。また、コヤの用途は貴重品の保管だけでなく、多岐にわたり、生活に密着して活用されてきた。そして、現在においても未だに活用されている。対馬の集落を研究する上で、切り離すことが出来ないコヤであるが、余り研究はされていない。本研究は、鰐浦の様に覚えて、非常に多種多様であるコヤがどのような経緯で形成されたのか、コヤの形成原理を明らかにすることを目的とする。鰐浦のみで行う局所的な研究であるが、コヤは島全体に存在しており、本研究から導き出される結果は、他の集落においても有効であると考えられる。また、副次的に現在の鰐浦の集落の姿を記録することも一つの目的である。

### 1-2 研究の方法

本研究は、大きく分けて現地調査、文献調査から構成される。現地調査は、2回行った。1回目の調査は、2011年9月26日から2011年10月2日に行った。主な調査内容は、コヤの実測と住人の方へのヒアリングである。2回目の調査は、2012年1月6日から2012年1月11日まで行った。1回目の調査で不足していた部分を補うことが主な調査内容である。文献調査では、現地調査からは得ることができない過去のことや、ヒ

アリングから得た情報を客観的なものとするために活用する。

### 1-3 研究対象地の選定

大きいコヤ群を持つ集落としては、鰐浦、舟志、志多留などがあげられる。既往研究から見ても、これらの集落の中で一番研究されていないのが、鰐浦のコヤ群である。また、鰐浦のコヤ群は対馬最大であることから本研究では、対馬市上対馬町鰐浦の集落を研究対象地と定める。

### 1-4 対馬について

#### ①概要

対馬は、九州の北方、長崎県と朝鮮半島の間位置する島である。本土よりも朝鮮半島から非常に近い。そのために、古くから朝鮮出航の際に重要な島であった。面積は約696 km<sup>2</sup>であり、日本の島の中では、北海道、本州、四国、九州を覗くと6番目に大きい。

#### ②地理

島の97%は山地であり、山がちな地形が続き、平地はほとんど存在しない。風が強いことが一つの特徴である。夏から秋にかけては、台風の影響もあり、しばしば強風が吹く。また、冬は「アナジ(穴西)」と呼ばれる季節風が、強く吹き込んでくる。対馬の年間平均風速は約3.0km/sと比較的強い。

#### ③生業

基本的に、半農半漁で成り立っている。農業といっても、稲作などは余り進展せず、山地におけるコバサク(焼畑)が主な産業であった。<sup>1</sup>

## 1-5 鰐浦について

### ①概要

鰐浦は対馬最北端の集落である。鰐浦は朝鮮半島と非常に近く、秀吉の朝鮮出役時には、最前線の兵站港として利用された。また、講和後には関所がおかれ、朝鮮渡海の要津であった。<sup>2</sup>

### ②地理

狭小な土地の上に集落は構成されている。対馬の各所で見られるリアス式海岸が北部の海沿いに並び、南は勾配が急な山が囲んでおり、海岸と村の周辺が全て断崖絶壁と急斜面となっている。鰐浦は非常に北西の風が強い。対馬は、アナジという強い季節風が吹くと述べたが、鰐浦は浦口が北西に向いているためにこの風がそのまま集落内に吹き荒れる。

### ③生業

鰐浦も他の集落と同様に、基本的には半農半漁を生業としている。しかし、昔から海に依存した生活が繰り返されてきたことから、鰐浦の経済は「海七山三の経済」と呼ばれており、半農半漁といっても、漁業が農業よりも大きい比重となっていた。

## 第2章 コヤについての概要

### 2-1 コヤの成り立ち

対馬は北西の風が強く、密集して民家が建てられていることが災いし、古くから強風による大火に見舞われてきた。そして、家の財産が火災により損失しないように、母屋と別に倉庫を建て、そこへ貴重品を保管していた。これが、コヤが生まれた理由とされる。コヤが建てられた年代は不明な点が多いが、小林久高らによる研究<sup>3</sup>によれば、古いもので、江戸時代に建てられたものが見つかっている。また、新しいものは昭和32年に建てられたコヤも見つかっている。コヤの歴史は古いが、現在に至るまで増減を繰り返しながら形成されてきたといえるであろう。



図1. コヤの構法

### 2-2 コヤの構法と用途

#### ①構法

既往研究<sup>4</sup>によると、コヤの基本形式は高床構造の平屋建てで、壁は板張り、屋根は石葺きである。(図1)基本的な構造は、全ての集落において共通しているが、下屋の形式は集落により3種類に分類される。(図2)

#### ②用途

コヤは、貴重品を保管する用

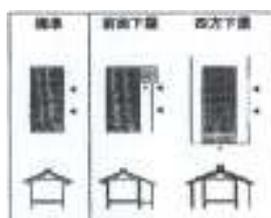


図2. 下屋の形式

途のみでなく、その利用は多岐に渡る。主な利用としては、海藻類の保存、穀物の保存、衣装の保管、食器の保管、冠婚葬祭の道具の保管、漁具の保管などが挙げられる。用途ごとにヒョウモンゴヤ(麦などをいれるコヤ)、イショウゴヤ(衣装などをいれるコヤ)、ミソゴヤ(醤油などをいれるコヤ)という名前も存在している。上記以外の用途も存在し、台風等の災害時における避難小屋、出産時の産屋、死者が出た時の忌み小屋などがある。また、コヤの内部において海草類を束ねる作業も行っていることから、保管という用途を越え、生活の一部として存在していたことがわかるであろう。

### 2-3 ベードコ

ベードコとは、コヤの近くなどに設けられた作業場である。コヤは、主に海草類や穀物を保管するための倉庫であるが、保管するために、穀物や海藻類を乾燥させる場所として必要なのがベードコである。基本的に、コヤとベードコは対になるものであり、コヤはベードコの周辺に建てられていることが多い。ベードコの立地はコヤと同じく集落により違いがあり、屋敷内の一部に石垣で仕切って確保するものもあれば、屋敷外にそれぞれの家で個別に持つものもあれば、屋敷外に数軒の家の分をまとめて持つなどの形式が存在する。

## 第3章 現地調査とコヤの現況

### 3-1 実測調査

#### ①配置図

鰐浦の集落では、159棟のコヤが存在していることが明らかになった。(図3)その内、139棟が海近くに密集して建てられている。残りの20棟は、住宅の敷地内や、道沿い、山際に建てられており、鰐浦の集落全体に点在している。本研究においては、この海沿いに建てられている139棟のコヤを研究対象とする。残りの20棟は、敷地内などに独立して建てられているものであり、所有者の忖意性がコヤの様相について強く表れている。よって、本研究の目的である形成原理を分析する上で、適当ではないかと思われる。



図3. コヤ配置図

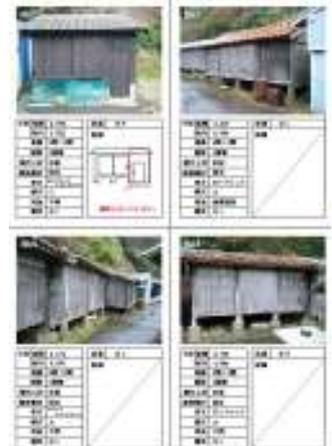


図4. データシート例

## ②データシート

コヤ毎にデータシートとして、必要と思われる情報をまとめていく。(図4)これを用いてコヤを詳細に分析していくことが出来る。

### 3-2 コヤの現況整理

次の各内容に対して、コヤの現況を整理し、鰐浦のコヤの基本形を定める。

#### ①規模

2間×2間が2棟、3間×2間が120棟、4間×2間が6棟、5間×2間が3棟、6間×2間が5棟、7間×2間が1棟、3間×3間が2棟存在している。数から考えても、鰐浦におけるコヤの基本形は3間×2間だといえるであろう。

#### ②階数

1階建てが129棟、2階建てが10棟であった。1階建てのコヤが大部分を占めることから、1階建てのコヤが基本形だと言えよう。

#### ③壁仕上材

杉板が104棟、トタンが19棟、スレート材が7棟、石膏ボードが3棟、杉板(一部石膏ボード)が4棟、杉板(一部スレート材)が1棟、杉板(一部トタン)が1棟存在した。使われている材は、杉板・トタン・スレート材・石膏ボードの4種類である。圧倒的に数が多いことから、杉板で壁を仕上っているものが、基本形だと言える。中には、杉板に一部だけ他の素材を使っているものも存在した。

#### ④束石

石が29棟、石+ブロックが50棟、石+コンクリートが9棟、石+ブロック+コンクリートが19棟、コンクリートが10棟、コンクリート+ブロックが21棟、束石がないコヤが1棟であった。使われている材は、石・コンクリートブロック・コンクリート(ブロックでない)であった。石に、コンクリートブロックを積み重ね、束石を構成しているものが数としては一番多く、現在の基本形といえるだろう。

#### ⑤トモフサギの様式

トモフサギに施されていた加工は次の9種類に分かれる。(図5)Aが54棟、Bが10棟、Cが2棟、Dが6棟、Eが9棟、Fが39棟、Gが4棟、Hが3棟、Iが6棟、A+Dが1棟、B+Dが2棟、A+Bが3棟である。AかFの様式でつくられているものが多いことがわかる。

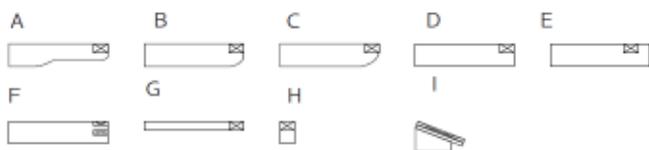


図5. トモフサギの様式の種類

## ⑨用途

全部で45棟のコヤについて聞き取ることが出来た。コヤの総数は139棟であるので、全体の3分の1程度である。データとしては45棟の中で、漁業道具の保管が11棟、衣装の保管が15棟、海藻の保管が10棟、食器類の保管が6棟、農業道具の保管が1棟、醤油の保管が1棟、衣装と食器の保管が1棟、様々なものの保管が1棟であった。

## ⑩電気

電気が備えられているコヤは、20棟であった。

以上より、鰐浦のコヤの基本形は、1階建てで規模が3間×2間であり、壁は杉板、束石は石+ブロックで出来ているものだといえる。

## 第4章 資料と現状にみるコヤの変遷

ここでは、過去の資料と現状を分析することにより、コヤの配置や様相の変遷を分析する。

### 4-1 過去の家屋台帳との比較

表1は、昭和15年における家屋台帳<sup>5</sup>と現況を比較したものである。昭和15年~20年におけるデータが当時の全戸数の7、8割だったことを考えると、総数に関しては大きな変化はないと思われる。鰐浦のコヤの基本形である1階建て3坪のコヤについては、割合で考えると減少しているといえるであろう。比較した際の大きな違いとしては、コヤの形状の種類である。現在のコヤの分類を見てみると、4坪や5坪といった、昭和15年~20年ごろには存在していなかった規模のものが見られる。これは、年月を経て、4坪や5坪といった大きさのコヤが現れだしたことを示している。

	昭和15年~20年	現在
1階建て3坪	103棟	111棟
1階建て4坪	3棟	5棟
1階建て4.5坪	0棟	2棟
1階建て5坪	0棟	3棟
1階建て6坪	0棟	5棟
1階建て7坪	1棟	1棟
1階建て10坪	1棟	0棟
2階建て3坪	3棟	9棟
2階建て4坪	1棟	1棟
総数	112棟	139棟

表1. 過去の家屋台帳との比較

### 4-2 トモフサギの様式

様式は、コヤが建てられたときに施されたものと思われる。つまり、このトモフサギの様式を分析することにより、コヤの建てられた年代の違いを示すことが出来るであろう。配置図(図6)を通して確認すると、この9種類の様式のコヤが不規則に並んでいるように見える。しかし、詳細に見ていくと、立地に偏りを見

ることが出来る。例えば、川を隔てて西側は比較的Aが多い地域、東側は比較的Fが多い地域となっている。つまり、正確なことは不明ではあるが、西側と東側でコヤが建てられた時期が違うという可能性がある。また、東側のコヤ群に着目してみると、東側のコヤ群の中でもいくつかのブロックに分かれることがわかる。つまり、東側のコヤ群の中においても、全てのコヤが同時期に建てられたのではなくいくつかの年代に分かれて建てられてきた可能性はある。以上より、鰐浦のコヤ群は、同一の時期に全てのコヤが建てられたわけでないことが推測される。



図 6. 様式による色分け

#### 4-3 過去の配置図との比較

##### ①1950年(図7)

この時代と現在との大きな違いは道であろう。中央の道が存在おらず、東、西に伸びる道がメインの道となっている。コヤは、この道に沿うように建てられていることがわかる。コヤの配置は、図面の精度から考えると大きな違いがないように思う。この時代から現在のコヤ群の骨格は作られていたのだろう。

##### ②1973年(図8)

図7と比較すると、コヤの数、配置が著しく変わっているが、短期間でこれだけの変化が起こるとは考えにくい。よって、図面としての精度は低いといえよう。読み取れることとしては、中央の道が新しく出来上がっていることがある。それに伴い、移動させられたコヤが存在した。また、海沿いには新たにコヤが建てられている。つまり、新たにコヤが建てられたり、移動させられたりしながら現在の鰐浦のコヤ群の姿が出来上がっていったことがこの配置図からわかる。

##### ③1990年(図9)

現在の姿と非常に近い。港が新たに整備されている。現在は余り意識されないが、コヤの間を通る道が濃く



図 7. 1950年の配置図



図 8. 1973年の配置図

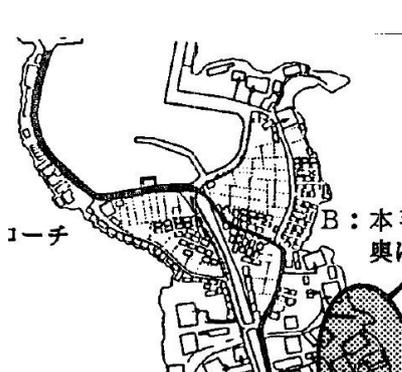


図 9. 1990年の配置図

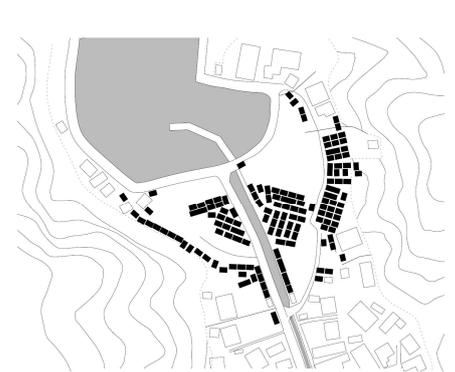


図 10. 2008年の配置図

かかれているので、この時代は重要な道であったのかもしれない。

##### ④2008年(平成20年)

現在とほぼ同じ配置を示すが、中央の道路と海が交わる場所に存在するコヤは現在南側に移動している。また、西側のコヤ群の中に現在と違う形状をしているものがある。つまり、2008年から現在にかけても、移動させられたコヤや形状に変化があるコヤが存在していることがわかる。

①、②、③、④を通して、集落の道・港などが変化してきたことがよくわかる。また、中央の道が出来上がることで、移動させられたコヤが存在するということが、海沿いのコヤが新たに作られたことは、年月を重ねるごとにコヤ群の姿が変化してきたことをよく示しているだろう。驚きなのは、2008年以降も未だにコヤの姿は変化を続けていることである。

### 第5章 コヤの形状に関する考察

ここでは、規模、階数といったコヤの形状について、配置図などを用いて分析する。

#### 5-1 規模

第3章から、鰐浦におけるコヤの規模の基本形は、3間×2間だといえる。規模ごとに色分けした配置図(図11)から、この基本形以外のコヤの配置を見てみると、これらのコヤは、コヤ群の外側に位置していることがわかる。そして、詳細に分析してみると、これらのコヤは基本形といったコヤを改造してつくられているものだと判明した。コヤ群の外側は回りにスペースが多く、改造がしやすい。結果として、外側にこれらのコヤが立地しているといえるであろう。



図 11. 規模による色分け

#### 5-2 階数

鰐浦のコヤの基本形は1階建である。2階建のコヤの立地を見てみると、比較的小規模の内部に位置していることがわかる。(図12)ヒアリングから1階建の

コヤを2階建に変えたものがあったが、階数を増やすことも増築だと捉えると、コヤ群の内部に位置している理由もわかる。コヤ群の内部は、敷地に余裕がない。よって、コヤの保管スペースを広げるためには、高さを上げるしか方法はない。結果としてコヤ群の内部に2階建てのコヤが多くなると言えよう。



図 12. 階数による色分け

### 5-3 鱈浦の区画割りの変容



図 13. 旧公図



図 14. 新公図

旧公図(図 13)の作成年代は明らかではないが、明治期の絵画を元に作成されたといわれている。新公図(図 14)は平成 8 年に作成された。両者を比較すると、地番の位置関係は余り変化がないが、土地が細かく区分されたことがわかる。これは、元々、共有地に建てられていたベードコヤコヤが、それぞれの領域ごとに区分され個人の所有に代わっていったことを示している。

### 5-4 コヤの改造

コヤの多様な形状は、コヤの改造が関わっている。鱈浦のコヤにおける改造は以下の 4 種類に分類された。

#### ①増築

鱈浦のコヤの中で一番多い改造である。敷地いっぱい増築しているものもあれば、ベードコの土地を活用しているものもある。



図 15. 改造による色分け

#### ②減築

コヤの規模を縮小しているものである。主に敷地の形状に合わせるために行われている。

#### ③屋根を繋ぐ

2 つのコヤの屋根を繋いでいる。瓦屋根をそのまま繋いでいるものもあれば、他の材を用いて繋いでいるものもある。コヤとコヤの間は、半屋外空間となり、主に物置として活用される。

#### ④特殊形

一部が高床式のものや、車を通すためにコヤを四角くくりぬいたものなどがある。コヤを自分の使いやす

いように改造したものである。

これらのような改造を行う理由としては、コヤの保管スペースを増やす、敷地に対応させる、使いやすくするといったことが関係していることが判明した。また、このような改造が行われた背景には、土地の区画割りが細かくなり、コヤが個人所有となったことがある。敷地に合わせ、各々が改造を行っているのである。

## 第 6 章 コヤのメンテナンスに関する考察

コヤはメンテナンスされることで、昔の材を使い続けている。ここでは、メンテナンスと関係の深い、壁仕上材と束石について分析したいと思う。

### 6-1 壁仕上材

第 3 章からもわかるようにコヤの壁仕上材としては、杉板、トタン、石膏ボード、スレート材が使われている。一番多かったのが、杉板から出来ているコヤである。ヒアリングによると、昔は全て杉板



で出来ていたようである。杉板以外の素材に共通する特徴は、安価で、施工がしやすいことである。これらの材が生まれた背景には、自分達でメンテナンスを行っていたことがある。しかし、近年高齢化が進み、自分達でメンテナンスを行うことは難しく、現在は大工や建設会社に委託している人が多い。その結果、これらの簡易な材を使う必要性は低くなり、最近メンテナンスを行ったコヤは昔のように杉板で出来ているものが多い。

### 6-2 束石

対馬のコヤは、柱の下端部が土などの水分で腐ってくると、下端部を切り落としてそのまま使い続ける。それに伴い、コヤの高さが変わってしまうので、その分束石を高くしていき、コヤを持続させる。元々全てのコヤは、石を束石として利用し、その上にコヤ



を築きあげられてきた。しかし、石を重ねることは安定性を取ることが難しく、時代を経るにつれ素材も変化してきた。現在は、石の他にも、コンクリートブロックやコンクリートを打設しているものなどを見ることが出来る。最近建て替えを行った建物はコンクリートを打設しているものも多い。コヤを見ていくと、現在も石のみで束石を構成しているコヤも存在する。これらのコヤは、傷んだものも多く、あまりメンテナンスが行われていないものが多い

と思われる。配置を見ると、これらのコヤはコヤ群の奥の方に存在しているものが多い。これは、奥の方は使い勝手が悪いことで、余り使われていないことを示しているだろう。

## 第7章 コヤの利用に関する考察

### 7-1 用途別に見る配置

用途による色分けを見ると、用途と立地の関係性が見られる。漁業道具をいれるコヤは海に近いところ。海藻、穀物のコヤはベードコの近くによく見られる。衣装小屋は、漁業道具や、海藻類などのコヤと比べると、コヤ群の内部の方にあるように思われる。食器類、醤油、農業道具を入れ



図 18.用途による色分けするコヤも同様にコヤ群の内部の方にあつた。様々なものを入れているコヤは、所有者の家の近くに存在していた。家にある邪魔なものはそのコヤに入れるのだという。同じような構造を持つコヤが何を理由に使い分けられるかという、コヤの立地が関係していたことが明らかになった。コヤはその立地に適した用途で活用されていたのである。

### 7-2 コヤの利用の現況

昔と現在の利用の変化をヒアリングした結果、昔と比べるとコヤの利用は大幅に減ったことが判明した。特に、ヒョウモンゴヤ(穀物や海藻を入れるコヤ)においては、現在は麦の栽培が行われておらず、米についても、どこでも買えるため余り保管していない様子であった。また、海藻類においても今は、すぐに買い取ってくれるのでコヤでの保管はあまりない。コヤの利用が減少したもう一つの理由として、漁協の貸し倉庫が建てられたことがある。鰐浦から海沿いを東に進んだ先に、国境トンネルが存在するのだが、その麓に漁協倉庫は存在している。家型の長い倉庫が2棟並んでいる。中には、20個もの部屋が存在しており、安く借りられ、車で近くまでいけることからこちらの倉庫を利用するものも多いようである。

## 第8章 形成原理

コヤの形成に対して影響を与えたこととして、地理的な変化による影響、社会的な変化による影響に分けて分析していく。

### 8-1 地理的な影響

#### ①道の変化

鰐浦の中央の道は、昔は存在していなかった。過去の配置図の比較からもわかるように、この道が出来上がったことで、移動させられたコヤが存在している。また、近年においても橋の工事のため、南へ少し移動

させられたコヤが存在した。このように、新たな道が出来上がることで適切でない立地のコヤは、移動を余儀なくされる。その結果、配置が変化する。

#### ②区画割

コヤやベードコは元々共有地に建っていたが、土地が細かく区分されていき、個人個人の所有に変わっていった。この細かい区画割りが与えた影響を顕著に表しているのが、コヤの改造である。自分の敷地を限りなく利用する事例など、個人の所有に変わったことで、このような様々な形状のコヤが作られるようになった。

## 8-2 社会的な影響

### ①メンテナンス方法の変化

昔は、自分達でメンテナンスを行っていたが、近年、高齢化などの原因からメンテナンスを各自で行うことが難しくなった。その結果、メンテナンスは大工や建設会社に委託することで、トタンやスレート材などの簡易な素材が使われなくなってきた。このような使用する材の変化が、結果として、様々な様相のコヤを生むことになる。

### ② コヤの利用の変化

第8章でも述べたようにコヤの利用は減少している。その結果、使うコヤ、使わないコヤというヒエラルキーが生まれる。それはメンテナンスにも影響し、綺麗なコヤと劣化したコヤという違いができ、多様な様相を生み出すこととなる。

## 第9章 結論

本研究の目的である、コヤの形成原理について考察していった結果、地理的な影響や社会的な影響を受け、現在のコヤが形成されてきたことが判明した。鰐浦のコヤ群は時代や環境に合わせて立地や形状や様相が変化していくことで、多様な姿が生み出されていたのである。このような適応力が、現在もこれらのコヤが活用されている理由の1つとして考えられるであろう。このように、適応していくことが出来た背景として、コヤ自体が加工しやすく、移動できるという潜在性を持っていることも忘れてはいけない。鰐浦のコヤの利用は年々減少しているが、現在においても未だに鰐浦のコヤの姿は変わっている。これから先も鰐浦のコヤの姿は変容していき、多様な姿を現すであろう。

### 参考文献

- 1 「対馬の民家における平柱構法の特性—ホンヤ・ウマヤ・コヤの構法の比較検討— / 小林久高 / 2008」
- 2 益田庄三編「対馬の漁村」(行路社 1994) p.94
- 3 「対馬における「コヤ(板倉)」の建築構法の特性/小林久高, 安藤邦廣, 黒坂貴裕, 濱定史, 釜床美也子, 柳和先 / 2007
- 4 前掲書3
- 5 「対馬鰐浦にみる集落と家屋の持続と変容(持続と変容の実態の研究—対馬60年を事例として)/ 津田良樹 2011」

## 討議等

### ◆討議【横山】

研究対象としては、おもしろい。一つは文化財的な価値を記録・保存していく意味合いがあると思う。コヤを解析することによって、何を言おうようとしているのか？例えば、コヤの変遷から地域コミュニティとか生活スタイルがこう変わっているとか。

◆回答：本研究は、コヤの形成原理を解明し、コヤの研究に対して新たな示唆を与えることを目的としています。既往研究より、コヤについての研究は、構造や聖性といった観点から分析しているものを除けば、コヤをマクロな視点で分析しているものがほとんどでした。本研究では、コヤを解析することにより、地域のコミュニティや生活スタイルの変遷などを分析してはいません。コヤ1つ1つをミクロな視点で分析することにより、鰐浦の多様なコヤの形成原理を明らかにしています。研究の方法に関しても、今までの研究では存在していなかった、壁の素材や束石などというミクロな視点から行っています。また、本研究から導き出した形成原理は他の地域に対しても有効であると考え、コヤの研究に対して、新たな示唆を与えています。

### ◆討議【内田】

形成原理とは具体的になんなのか？新たな示唆とは具体的に？

◆回答：本研究において、形成原理とは地理的な影響と社会的な影響という2つの観点から導き出しています。地理的な影響とは、道の変化、区画割の変化のことを指しています。新たな道が出来上がることで、移動しているコヤが存在しており、区画に合わせて、コヤを改造しているものもあることから、コヤの配置や形状に変化を与えていると考えます。社会的な変化とは、メンテナンスの変化、利用の変化のことを指します。メンテナンスの変化により、簡易な材から杉板など、使用する材に違いが生まれます。利用の変化により、使うコヤ使わないコヤという違いが生まれることで、コヤの様相に影響を与えていると考えます。これらのことがコヤの形成に対して直接的に影響を与えており、本研究において形成原理と述べています。新たな示唆とは上記でも述べたように、研究の方法や形成原理自体が新たな考え方となっており、コヤの研究に対して新たな示唆を与えています。

### ◆討議【佐久間】

減築ですが、ストックをどのように活用していくかなどで今に置き換えても注目されている。減築をするモチベーションがないと、お金をかけてやる意味がない。放っておけばよい。これが減築における問題。区画割が原因とは？コヤが建っているところに区画割の線を入れることは非常に不自然なことのように感じる。コストをかけてまで区画割が優先されているのか？

◆回答：減築を行う理由については、厳密な答えはわかっていません。可能性の一つとして、区画割に合わせて規模を縮小したということがあると思われます。他にも、山沿いのコヤなどは、斜面に合わせて規模を縮小したものも存在しており、土地にあった形状に変えるために行っていると思います。

### ◆討議【三谷】

鰐浦の戸数と人口を教えてください。

◆回答：戸数は明らかではないですが、人口・世帯数に関しては、平成24年1月末現在で、世帯数が124世帯、人口が247人です。

### ◆討議【横山】

配置図が1500分の1くらいしかない。この精度は低い。規模に関しても、1間×2間とかでいいのか？スパンは統一されているのか？歴史の研究ではないが、それはきちんとやるべき。最初の研究だから幅広くやったのかもしれないが広すぎる。

◆回答：本研究においては、調査が1人であったこと、時間の関係などで記録の保存という点では少し至らない部分があるかと思います。本研究の目的は、鰐浦のコヤの形成原理を明らかにすることであり、集落の姿を記録することは副次的なものです。また、研究内容に関しては、幅広く調べなければ不明である点も多く、このような形となりました。コヤについてのより詳細な研究、詳細な記録に関しては本研究の課題であると考えています。